

④ 4512-^P2/2 末

④ 4512-^P2/2 4, 5/7 P

④ 4512-^P2/2 時々の史(2) 読む 70+

「天武朝」北山茂夫46 云544?

甲子の制

我が国にとって

百濟派兵の失敗は、我が国にとって大きな危機の到来を意味していた。

天皇は、先ず氏族対策を打ち出された。

天智紀称制三年(甲子年) 六六四年(二月)

九日条に、

天皇、大皇弟に命じて、冠位の階名を増

え換ふること、及び氏上・民部・家部等の事を宣ふ、其の冠は二十六階有り。云々

とある。(第八十三章へ大皇弟の項において既述)

多分

高市天皇が、大海人皇子(後の大皇弟)

に命じられた

のであろうと思われる。

なお、歴史家が「甲子の制」と呼ぶこの制

度更改は、大略次のようなものである。

15.8.9月②
 将部 将軍大將
 天武天皇 49
 天武天皇北山 49
 家部 2212
 民部 3799
 二十天
 天武天皇北山 49
 天武天皇北山 49
 天武天皇北山 49

甲子の制の第一。爵位を、
 (六四九)二月の制度では十九階であつた。
 又甲子の制の第二。朝廷は、大氏、小氏、伴
 造らの氏上(代表者)に、国家的荣誉とされる大
 刀・小刀・干楯・弓矢を与えた。また、民部
 (豪族の私有民)、家部(家々で使役した公
 民)を定めた。
 民部・家部を定めたのは、不満を抱く豪
 族の要求をみたそうといたもので、大化改新
 以後の公民制そのものを傷つけぬと
 う悪結果をうむ。それを承知のうえで、宥和
 政策として実施せざるをえなかったところ、
 一時的とはいえ、弱みがあつたようにも解さ
 れる。
 甲子の制の裏には、次のような
 意味合いが含まれていたのであるかも知れない。
 この頃には、前年白村江の戦いに敗れた将
 帥たち加、疲れ傷ついた兵士ともなつて帰
 国していった。こうした将兵の労苦を、そのま

二七
中云
報 113 2146

ま報いかにするておくことが出来なかつたの
ではな^かだううか。恐らく^{おそ}甲子^{きのね}の制^{せい}には将^{しょう}
兵^{へい}に^{たい}対する^{ろん}論功^{こう}行賞^{こうしょう}の意味^{いみ}がつけ加^くえら^れて
いた^のとであううと推測^{すいそく}されて^ている^で。日本
の歴史^し (2) 飛鳥^{あすか}と奈良^{なら}、読売新聞社^{よみうりしんぶんしゃ}、七〇
七頁^{しちまい}。天武朝^{てんむしやう}、北山茂夫^{きたやまもふ}、中公新書^{ちゅうこうしんしょ}、四
七頁^{しちまい}参照^{さうしやう})

3月1日 2355P
再度の郭務惊, 来日
④4538

② 4520P

11月17日 敵対 1522
同 ④2341/2
④4517 7月9日
危機の到来を意味していた
④4538

唐の郭務惊 来日

唐・新羅の連合軍が、百濟を潰滅させて

しまったし

ということは、とりもなおさず、

大唐の強大な勢力が、日本の目と鼻の先

の対岸にまでも及んだ

という危機の到来を意味している

中国と日本とが、朝鮮海峡をはさんで敵対し

た局面など、いまだかつてなかった

勢いに乗った唐・新羅の連合軍が、玄海灘

を押し渡って攻め込んできたら、我が国はそ

れを防ぐとが出来たろうか。

「とんでもない事態になったものよ」

心の内に恐れていたこと、それはあつたが、い

ま現実となつてしまった今、人々は狼狽するば

かりで、―――――どうしたらよいのか分からな

かった。

*

4538 紀下570末 井上(下)270P 天智2年(663)8月28日大敗
 4521 紀下361 善隣- 弘1279 軍容 軍隊のつてた5
 4538 紀下361 善隣- 弘1279 軍容 軍隊のつてた5

唐の軍船が、朝鮮半島から南下してきて、威圧するかのうにその軍容を現わした。郭務悰らがやって来たのだった。
 相国寺の瑞溪周鳳が、室町時代の文明二年(一四七〇)に著わした我が国最初の外交書である『善隣国宝記』の巻上に、
 『海外国記曰く天智天皇三年四月、大倭客来朝。大使朝散大夫(散官、従五品下)上柱国郭務悰等廿人、百濟佐平禰軍等百余人、到對馬島。云々』
 とある。(『日本書紀』(下)、日本古典文学大系岩波書店、五七七頁、補注二六一五参照)
 『天智紀』神制三年(六六四)五月十七日条に、
 『百濟の鎮将(百濟を占領した唐軍の将)劉仁願は、朝散大夫(散官、従五品下)郭務悰らを遣わし、上表文をおさめた。』
 物とをたてまつった。
 とある。
 五ヶ月後の十月一日に、郭務悰らを送り出す

次级衍

コクヨ ケー-20 20×20

天竺
改行

政行

懷 < 117^P

433

H5.8.12(木)⑤
H9.3.15(土)

4,524^P

前2頁 419

④4521^P 末

15きえ
律義 2314^P

前12頁

部といえ

■ ーかしなから、^{リチギ}律義な^{とう}唐の^{きんかん}散官郭務^{くわくむ}愔は、
やかて^{あま}甘い^{ゆうかく}誘惑を^{はら}振り払い、^{きん}帰国したいと

望んだのかも知れない。^{とりあえず}郭務^{くわくむ}愔は、

■ そこで、十月一日、郭務^{くわくむ}愔^{そう}らを送り返す

勅が出されたものの、^{みみのり}それ以後も、^{もの}物を^{たま}賜わった

り、^{きやうえん}饗宴を^{たま}賜わったりして、ぐずぐずと引き

延ばす策がとられ、^のやと十二月十

二日に、郭務^{くわくむ}愔^{そう}らは、^{きん}帰国の途についたので

なかりうか。

■ おそらく、郭務^{くわくむ}愔^{そう}は、日本国に^{たい}対し、^{きう}好意を

もって^{きかん}帰還した^ののだと^あいうう、と^く想察さる。

*

日本史940P
④4530P

4523 4525 4521
4523 4525 4521
4523 4525 4521

改訂

防備

さあ、唐の郭務悰は帰っていった。郭務悰の報告を聞いた唐の朝廷は、どのような口対

日政策に打ち出していくだろうか。

それは、向とも、判断のようもかかないこと

であつたが、いかりながら、

へ用心するに二一たことはない

と考えられたに相違ない。

ここに、次々と、防備の爲の施設が築かれ

ていった。

天智紀所制三年へ六六四一是歳条には、

對馬島・壹岐島・筑紫國等に防と烽の

ろーとを置く。又筑紫に大堤を築きて水

を貯へむ。名けて水城と曰ふ。

とある。

通常

日本水城は、唐・新羅連合軍の來襲にそな

え、大宰府の防衛の爲に築いた土塁である

と見られている。

いかし、この物語では、

唐・新羅連合軍が大宰府以南に進撃し

(木
の
と
い
)

東京創元社、永城(参照)

厚真図板 712 (木桶)

南の大倭国(肥後国)へ入るのを防ぐ為
水城を築いたのであうう

と考えてみたい。

この当時、大倭国(肥後国)には、高市天

皇(舒明上皇)の都があり、舒明上皇がおい

でになり、また幾多の宮や社寺や施設等が残

されていたのではなからうか。

水城

福岡県大宰府市、大野城市水城は、博多湾
岸から大宰府へ通じる平地のうち、西側の山

丘が最も狭まったところを、延長一・二時、

基底幅四〇メートル、高さ十三メートルの土塁で閉塞する

土塁の西端に門があり、その小門を博多湾へ

いたる官道が通過する。日本書紀に「筑

紫に大堤を築きて水を貯へて名けて水城

と曰ふ」とあるので、土塁の天宰府側に貯水

したという説もあったが、昭和五十年(一九

七五)の発掘で、博多側に幅六〇メートルの濠を設けた

ことが分かった。(第5回へ水城の断面を参照)土塁を貫いて濠に水を

通す木桶も発見されていゝ。(「日本史辞典」

昭和4526-1/6

4,526^P-2/6

・カラー

・右頁上半分に
大きく掲載
下さい。



中心部向け
1429

第6巻

写真図版 711 水城跡 (左が博多側) ←

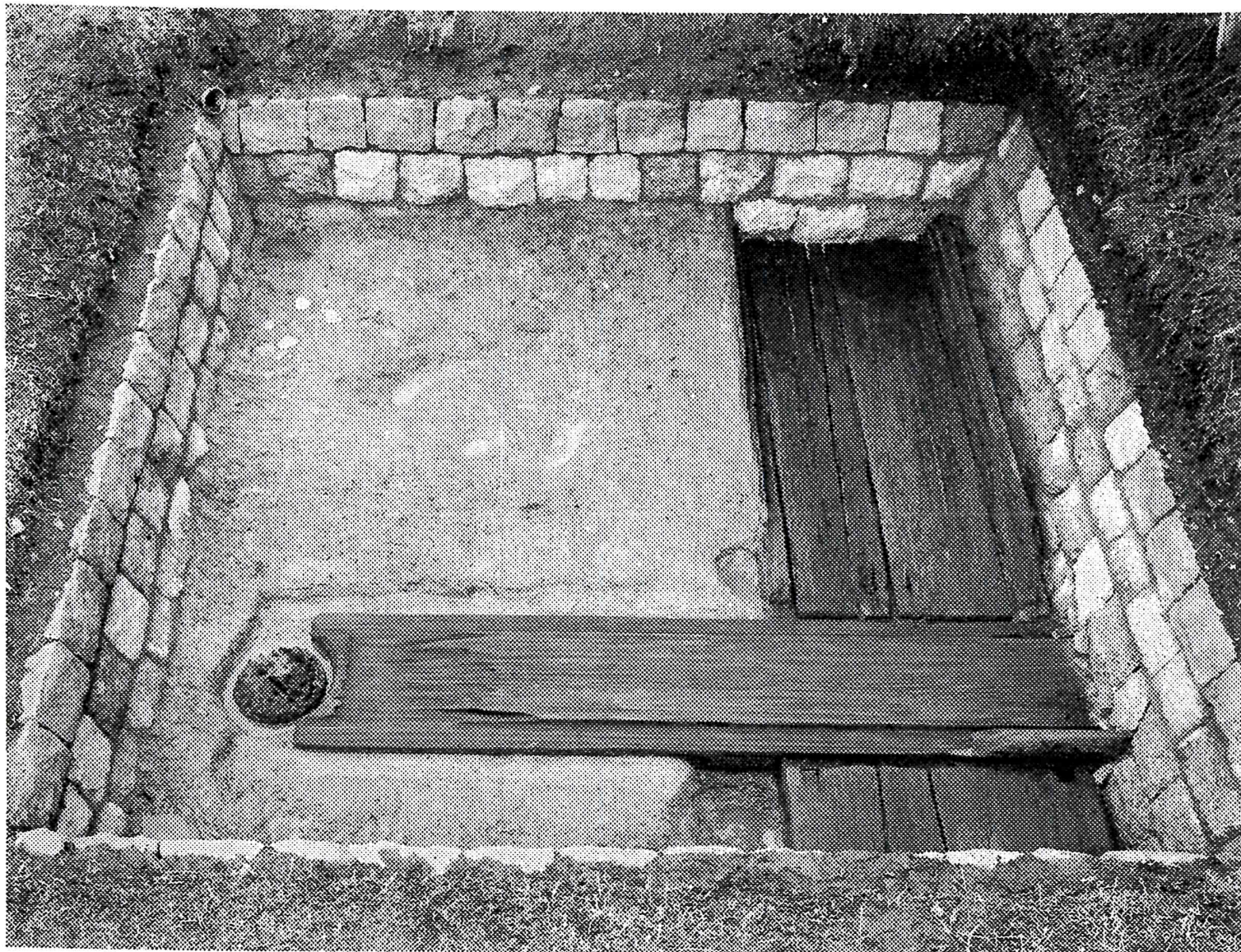
429 (2015) 12.5
→ 58分の1地図で確認した⑥
(手前側に穀物の池がある)

1399

『発掘が語る日本史』坪井清足監修 新人物往来社 昭和61年10月10日発行 口絵の34参照
1399 上下方向に連らな水城跡に 木々が生い茂っている
437

4,526^p - 3/6

・右頁下半分に
大きく掲載
下さい。



14QG

写真図版 7/2 水城検出の木樋（昭和5年に現国道3号線のそばで発見された木樋取水口部）

13QG

12QG — • ここから取り入れられた水は約80mの樋を通じて外濠へ放水される。

『発掘が語る日本史』第6巻、坪井清足監修、新人物往来社、昭和61年10月10日発行、232頁参照

カラー
左頁の上半分に、限度一杯はみ出して掲載下さい。

4,526P-4/6

みずき
• 水城の
部分を、
次頁のよう
に修整し
て下さい。

• 小水城と
近くの二筋
の川をトハ

トハ
• 水城の
断面は
第55図
に示す
通り
です。



④
4531P-3/3

と似ていて

* 新図地図
とは似ていない

1399

1409

第486図

おほの 大野城・みづき 水城・きい 基肄城の鳥瞰図

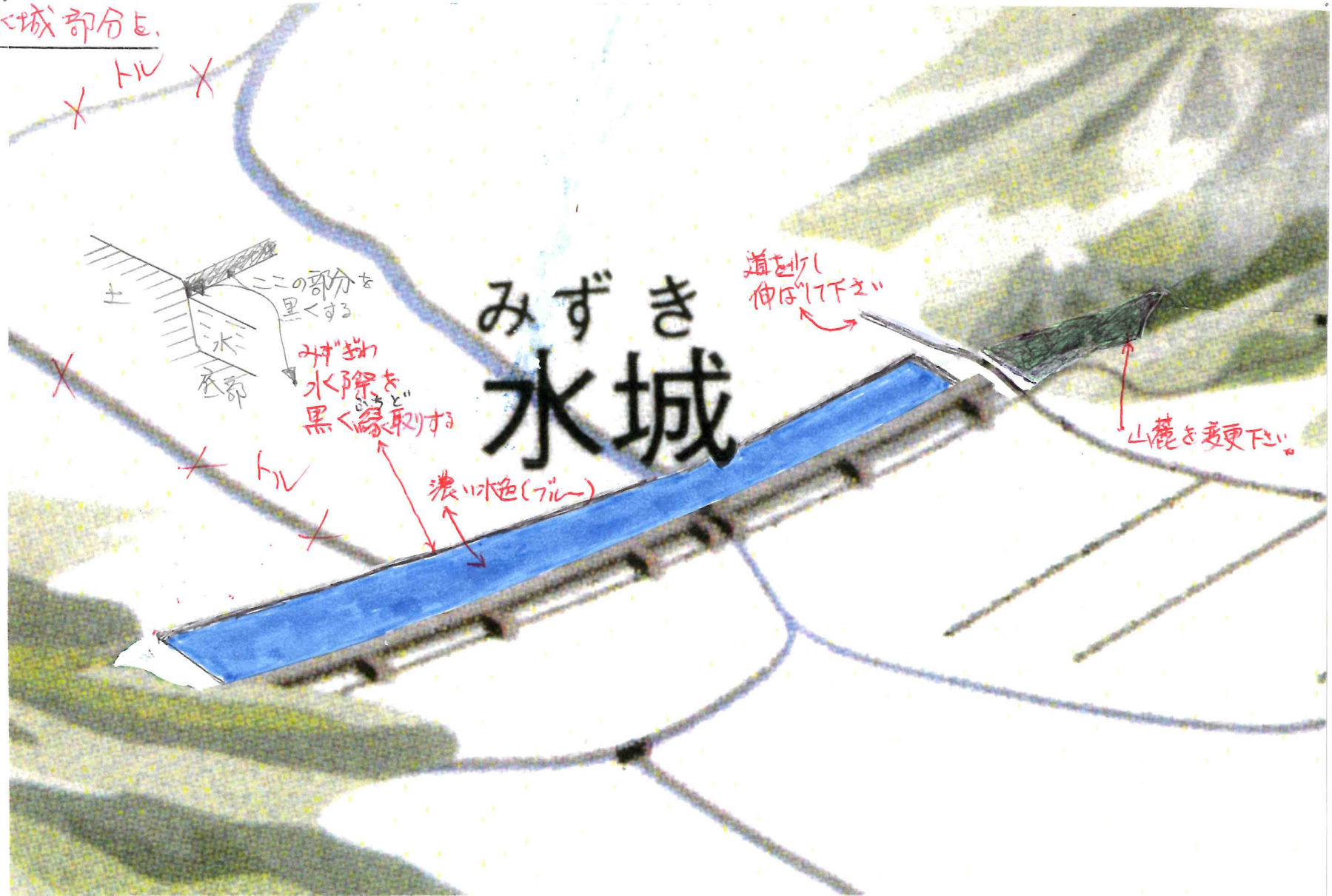
新やまと(1)-198頁「水城」
第55図 新やまと(1)-385「水城」
断面図

『大宰府天満宮』神社紀行(49) 学習研究社、2003年11月13日発行、12頁参照、(*一部修整) 439P

4,526P-5/6

前頁の水城部分と、

このように
変更して
下さい。



おす 構え 449P まあた 真新 2061P

新41-385P

4.527P-1/2

4555 大津屋
4730 神籠石

和同の史 19P 4533 菊池城 紀下581P
掘「遺」

ト10

平時には御笠川の水を本樋を通りて濠に導
き、戦時には御笠川をせきとめて貯水したの
であううか、という。『日本書紀』(下)日本
古典文学大系、岩波書店、五八一頁補注二七
六参照

■ 当時のいくさで、矢とりが鉄製の胴衣を
身につけた相手に殺傷効力を発揮する距離は、
せいぜい四〇メートル程までだから、幅六〇
メートルの濠は十分な安全圏をつくっている。
■ 濠を泳いで渡ろうとしても、土塁は約七〇

度の急傾斜面で、しかも土台部分の表面には粘
土がびっしり張りついており、滑って上か小な
い、といいう。『福岡の古代を掘る』朝日新

聞福岡本部、葦書房、一九頁参照
■ なるほど、博多湾の方から南へ向かって攻め

てくる敵の目に、日水城はたんなる細長
い水溜りに見える。『だ』

■ いか、その向こうに真新一い長大な堤があ
り、堤の上の多くの兵達がいちろを構えて
見おろしていたら、日水城は、外

やまぎわの山際 2231 秀き寄せる
元 318

支離滅裂 1133
元 1133
支離滅裂 (支離滅裂)

中央 4527-1/2
元 94
中央 (中央)

新羅 382
元 382
新羅 (新羅)

新羅 894
元 894
新羅 (新羅)

新羅 1312
元 1312
新羅 (新羅)

堀りのように思えるかも知れない。
ここに、
へ雷・新羅軍は、濠の東端、もしくは西端
の山際の道に殺到して来る。
に属しない。
とすれば、
へ日水城の東端、もしくは西端の
断崖が濠に迫る所が、大倭国(肥後
国)の都の方へ向かって進撃する敵軍を、一
に分断することのできる日防衛拠点となり
得る。
のではなかうか。
中央がくびれた瓢箪のような形になりな
ら軍勢の半分ほどが通り過ぎた頃を見はか
って、崖の上から突然射掛け、刀を抜いて
いかかり、分断したならば、敵の兵隊は
支離滅裂になつて逃げまどうであらう。
へ日水城は、敵軍を東・西の山際の方へ
おびき寄せ、為の作戦として築かれたの
う。

新(11)-363^p

続紀(9) 4-89^p
④ 357^p 2/4
4,528^p

(20)

④ 4526^p -1/5 13行へ

と推察される。

■ ~~前~~ 述の ように、

「土塁の両端に門があり、その水その水(の門)を博多湾へいたる官道が通過している」

という。

・あるいは、その二つの門は、

「天智朝当時」に「水城」の東西の山際に関所が設けられていた」

ということを示唆しているのかも知れない。

*なお

称徳天皇の

「水城は天平神護元年(七六五)三月に

修理された」

という(「続紀」)

(*)

「水城」によく似た工法の古い堤が、百済

にもあった。韓国西南部の全羅北道金堤郡扶

梁面に残る四世紀前半の貯水池の堤防遺跡、

「碧骨堤」だ。

■ この堤の基底部に、葦などを敷いた厚さ約

数分の植物炭化層が確認されている。

天の志
改行

聖年の天智紀稱制四年(六六五)八月条に

4,529P-2/4

図山図実在ファイルに有る

- ・カラー
- ・右頁上半分とはみ出して大きく掲載下さい。



カラー ↑

1229
川がき
石垣が100間(約180m)も続くので、「百間石垣」と呼ばれる。

1429 写真図版 713 大野城 北部域に築かれた百間石垣

大野城は、北に大きく谷が開く馬蹄形の山塊を利用した朝鮮式山城で、北と南は二重城壁をなす。

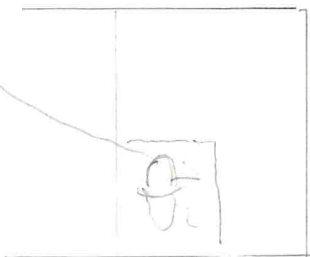
1329 『日本名城百選』村田修三 小学館 2008年9月30日発行 228頁参照 446P

4,529P-3/4

岡山県 南東コーポレート
有る

・カラー

右頁下(半頁)に
掲載して下さい。



1324

写真図版 7/4

おおのぼう
大野城

(ぼうない)

(いんくうけかな)

1204

平成19年の調査で、^(ぼうない)門の礎石に^(は)嵌め込まれた状態で発見された。中国・韓国に^(いんくうけかな)類似はあるが、日本では初めて。
 ・砲弾型の部分が^(は)回転軸となる。

1324

『日本名城百選』村田修三、小学館、2008年9月30日発行、229頁参照。

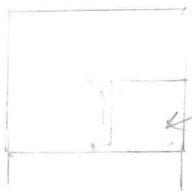
447P

左頁右上(4頁)に
大き〜はみ出し
掲載下さい。

柿木川

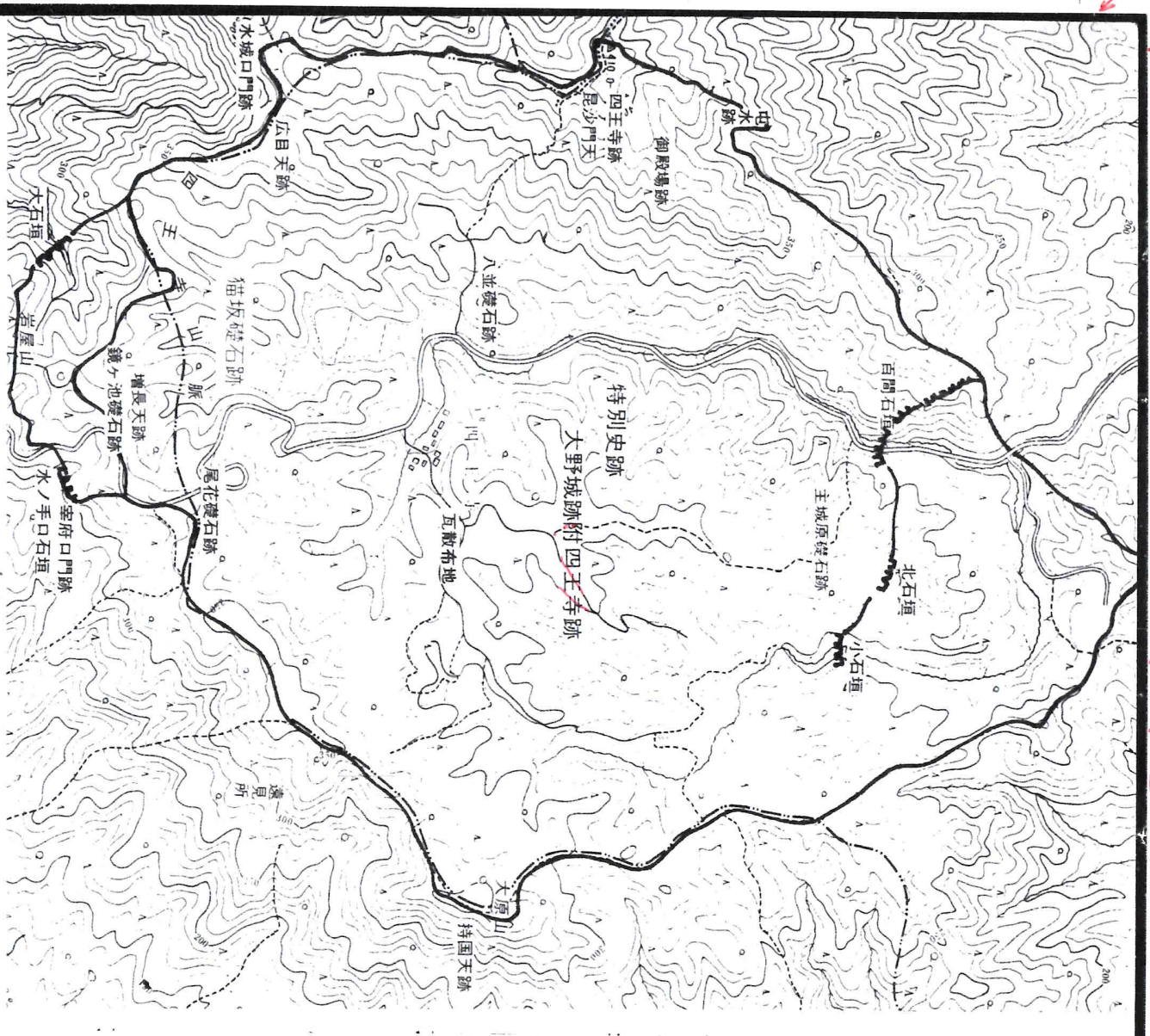
白間石垣と、大野城跡(四王寺跡)

↓を、太いゴケに下さい
破線に追加して下さい。



四王寺跡
は、ここにあり

4.529-4/4



1424 第488図 大野城跡(平面图)

1324
西都大宰府山藤井功・亀井明德、日本放送出版協会、昭和55年9月20日5刷発行
113頁参照

カット ←

4,530^P-7/3

→ カット

・カラー

・頁の上半分と
掲載下さい。

・左右を
限度一杯
はみ出させて
ください。

・暗くならない
ようにお願い
します。
(明るくして)
ほしい



←

140G

→

130G

写真図版 715 基肄城[椽城]跡 (佐賀県三養基郡基山町)

- 『佐賀県の歴史』杉谷昭 山川出版社 2002年3月30日(2刷)発行 口絵 47~49頁参照
- ・白村江の戦い(663年)の後、天智4(665)年に築かれた朝鮮式山城で、土塁・城門・礎石建物などが確認された。
- ・土塁の総延長は約4.4kmで、途中に3ヶ所の城門、1ヶ所の水門、二ヶ所の石垣(暗渠)がつけられている。
- ・礎石建物は、花崗岩の礎石を用いた総柱建物で、40棟以上が明らかになっている。焼米も出土した。

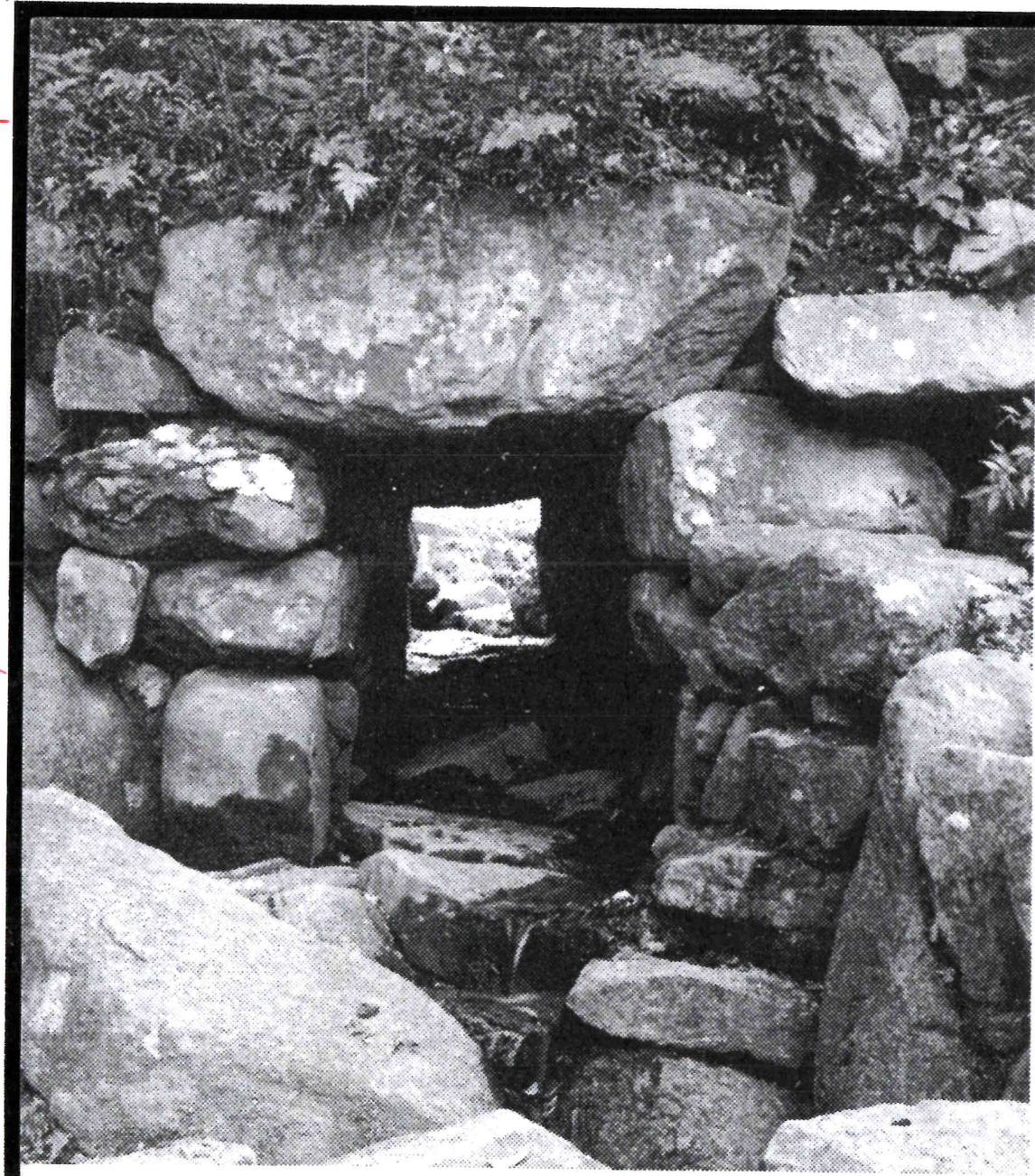
450^P

4,530^P- 3/3

頁の下半分に、
大きく掲載下さい。



黒
枠
を
ト
ル



カ
ツ
ト

13QG

14QG

写真図版 716

きい
おれ
基肄城南辺^{トV}の水門

『西都大宰府』藤井功・亀井明徳、日本放送出版協会、昭和55年9月20日5刷発行、121頁参照。

451^P

12.5 AM

天皇が居られるわけでもないのに

12.5 AM

大宰府を陥落させる為

点について理解にくく。

大宰府の背後ともいべき有明海の方から敵

が突然襲って来るように思えないからである。

また大宰府に楯籠り戦うことに、どんな

意味があるというのだらうか。大宰府の前面が打破された

大宰府に固執せず逃げればよいのである。普通を考えれば、大

宰府の後方にそのような山城を築いたという

のは、どうしてもやはり、

奇妙に感じられる。

大宰府前面の日大野城や日米城を突破した

敵軍が、我が日本国の中枢と云うべき大倭

国（肥後国）の都を目指して進撃した場合に

大宰府の後方に、大

々的な土塁・石垣を持つ日椽城を築いた

のかも知れない。

つまり、

①唐・新羅の連合軍の力が強大で、大野城や

水城で防ぎ得ないと判断した時には、一

目は散に支離滅

裂状態に陥り、南へ逃走すること

が企図されたので

天のき
改行

4.531P-1/3

逸走

赤色福岡県地図
宮地岳 339m

4529-46
左5の地図

新刊567P
狭帯は24帯
為す云1658P

4531P-2/3

狭帯も絶つ
2329

壁の声 1589P
狭帯 564P

4529-46
好機 1438P

筑紫平野 1483P
高等地図 図10

版 717 参照

(夜須町および基山町の北隣りに位置する東西に細長い市)

はないだろうか。
② もしも、唐・新羅の連合軍が、その誘いに乗って追撃し、筑紫平野(筑後川流域)へ打って出たならば、その時こそ反撃の好機である。
③ 日 椽城に、無数の旗が翻るゝとであろう。そして、鐘や太鼓が鳴り渡り、軍兵達のいってやつたりの関の音が轟きどよめくに遠いない。
④ 大宰府の狭帯の地を封鎖され、糧道を絶たれたら、一体、どういう結果になろうか。
⑤ 必ずや、筑紫平野に孤立した唐・新羅軍は、南北から攻撃され、為すところなく壊滅するであろう。
と想像される。
基山町の
基肆城の
なお、筑紫平野の北辺域には、
ほかに、阿志岐山城(宮地岳山城 標高三九八)筑紫野市の丘陵上で土塁が見い出されたという。(「朝日新聞」平成二十九年一月五日付「古代の土塁五〇〇」以下福岡で見つかったな) 写真図

4,531 P 3/3

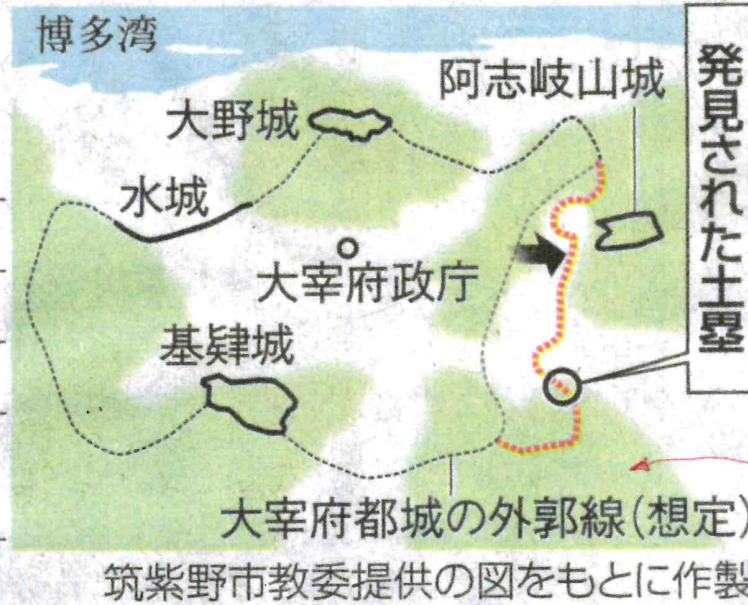
④4532^{P 2/3}
149F

・カラー
・頁の上半分。
上へ限度一杯はみ出し
掲載下さい。

・白い部分のヨコレを
トル。

大宰府の土塁

609年	筑紫大宰が史料に登場
660	百済滅亡
663	白村江の戦い
664	水城が築かれる
665	大野城、基肄城などが築かれる
701	大宝律令制定



筑紫野市教委提供の図をもとに作製



500年ほどにわたって
確認された土塁



土を何層も突きかためる古代
の技術で造られた土塁

④4526^{P 4/6}
149F
*福岡地図とは
似ていない
状の緑色も
トル
この部分に、山は無い
からです。
(500分の1地図参照)

中心よりわけ
13AG

142G 写真図版 717 福岡で見つかった古代の土塁500年

『朝日新聞』平成29年1月5日付 < いちからわかる! 古代の土塁500年福岡で見つかったな > 参照 454^P

紀小 381 ~ 2^{ハクホキノエ} 白林江 紀小 379^下

4,532^{P-1/3}

かいう 紀 2815^{P-3/2}
外寇 紀 351^P
肝要 508^{外口から攻め入って来る軍勢}
長門大印 508^{外口から攻め入って来る軍勢}

紀 4568^P
大宰府

大和への道筋にない日 大宰府の地

■ それにしても、この当時、我が国の首都が大和（現在の奈良県）にあったものなら、極めて当然のことながら、
へ関門海峡一帯こそが、海を押し渡って来る外寇（外国から攻め入ってくる軍勢）を防ぐのに、最も肝要な地点である。✓
と考えられた筈であらう、と思われ。

■ とはいえ、東には日下関や日門司の地が、防衛上、重視されたというわけではなかつたようである。

■ 一体なぜ、大和への道筋から少々はずれている北九州の幾分内陸部に入つた山峡の日大宰府の地が、そんなにも重要視されたのであろうか。

■ 六六三年の白林江での大敗以降、大宰府の周辺には防備の爲の大々的な施設である日水城、日大野城、日櫓城が、次々と築かれて

いったのだった。（既述）等

④ 4558P
新ヤ01-20516
後殿

日本書紀 紀下574注29 紀下192P
633P大宰 紀下369P

4,532P-2/3

④ 4529P ④ 4525P

へ 日 後殿 日 (内裏) や 日 朝堂院 日 を 備えた

な お、追 っ て 述 べ る よ う に、
大宰府の地に置かれたという記載は無い。
年当時、すでに日大宰府政庁日(都府楼)が
と記されていゝるものの、天智三、四

(2) 天智紀七年七月条などに「筑紫率」
(1) 推古紀十七年四月四日条以下に「筑紫大宰」

日 椽城 日 加築かれた
とでもいゝのであろうか。
一か、(六〇九)

も、大宰府政庁が創建されて、
この大宰府を守る為、日水城 日大野城
日 椽城 日 加築かれた

と疑問に思われる。
八六六三年の白村江での戦い以前に、早く
防衛施設によつて嚴重に守るべき、日何 日
この地にあつたといふのだらうか
天智祚制四年(六六五)頃、
四、および日大野城 日椽城 日加築かれた
日水城 日加築かれた天智祚制三年(六六

一か、不審なことに、そもそも、

H30(2018)11.3(世)~11.6(4回)
H31(2019)4.14(日)~4.14(3回)
令和2(2020)6.3(日)~6.4(4回)

サイト ④4525 概へ 4532-3/3 無視 234-2/2 たい 41 ④4537

4/4 下 6/4 6/3

(*)

日大宰府政庁は、天智祚制六年(六六七)三月以後、天智天皇によって創建されたのであろう。第25回へ大宰府政庁復元図参照。と考えたい。第84章へ大津宮の項等において詳述したい。図ともあれ、へどんなに大宰府の地に防衛のための堅固な施設を作ったとしても、これを打ち破る必要性がないのであれば、いままでもなく唐・新羅連合軍は、大宰府を全無視して大和国へ向かうであろう。と想到される。

* この物語では、唐・新羅連合軍が大宰府以南に進撃して南の大倭国(肥後国)へ向かうのを防ぐ為、水城、大野城、櫓城等を築いた。と考えてみたい。(第83章へ防備の項において既述)